

アンブロアズ・パレ没後四百年祭を顧みて

大村 敏郎

はじめに

日本医史学会・日本外科学会・日仏医学会という三つの異った基盤を持った学会の有志が集って、アンブロアズ・パレ没後四百年祭実行委員会を結成したのは一九八九年六月のことであった。会長には東大第一外科の森岡恭彦教授、私は発案者であり、三つの学会の関係者であることから実行委員長ということになった。

アンブロアズ・パレ (Ambroise Paré, 1510?~1590) は近代外科の父としてよく知られ、どの医学史の本にも書かれているが、それだけではなく、パレの外科はフランス語からオランダ語に訳された成書としてわが国に到来し、系統だった西洋医学の源流にもなっているから、わが国とは深い結びつきがある。

ただヨーロッパの情勢をよく理解していなかった当時のわが国では「蘭国外治の方」(オランダ外科)として受けとめ、フランス人の原著者パレの名も、またオランダ語の本の存在すらも伏せられて、技のみが伝わっていたのである。一部の医史学に詳しい人々を除いては知られていないこの事実を、広く外科医や医療関係者、もっと広めて医療の世話になっているすべての人々に理解してもらい、日本の医療文化のルーツを明らかにしたいと考えて、パレが世を去った一五九〇年から丁度四百年目の節目の年に顕彰事業を企画したのである。

この実行委員会は事業を計画して推進するに当って、共通の理解のために四回の勉強会を開いた。酒井シズ・蒲原宏・中西啓の三氏と私のいずれも日本医史学会の会員が講師を務めた。こうして着々と準備がすすめられたのであった。

日本の方が発足が早かったが、本家フランスにおいても、一九八九年秋にパレの生地ラヴァル市で、没後四百年の企画が持上っていた。このラヴァルという所は私にとつてもなつかしい町である。一九七二年秋に、この町へパレの生地を尋ねて旅をしたことが医史学への出発点になったのであった。パレが使った穿頭器(トレバン)がラヴァル城の博物館に保存されているのを見、市役所前の広場に立つパレ像が彼の没後二百五十年を記念して作られたものであることを知って、その当時から没後四百年に当る一九九〇年に何か記念行事をやりたいという構想をもっていたのである。

ラヴァルは人口六万余の小さい都市だが、マイエヌヌ県の県庁所在地で、ロアル川支流マイエヌヌ川に沿い、古い文化と中世の雰囲気を持ち、最近開通した新幹線ター・ジェー・ヴェー・アトランティクのもたらす現代の活気のまじった魅力的な町である。今はパリから一時間半で行けるが、私が最初に訪れた二十年前は特急でも三時間かかり、しかも一日に何本も列車が走っていなかったので、大変のどかな町だったと記憶している。

一九八九年十二月二十日のパレの命日の日に、ラヴァル発信の手紙が年賀状にまじって私の所へ舞いこんだ。「三百九十九年前の今日、パレはパリで死にました」という出だしで、ラヴァル市におけるパレ四百年祭の案内と、「日本に与えたパレの影響」を語りよきてくれという招聘状であった。発信者はパレ協会会長のクレン氏 (Bernard Krenn)。その蔭にはフランスにおけるパレ没後四百年の行事の動向を知りたがっていた私にフランス側の仏日医学会会長ピエール・ピシヨ (Pierre Pichot) 教授の協力があつたのである。

クレン氏の手紙によると、私の名はフランスのパレ研究書にのっているので知っているといる。その本とはポール・デモートル (Paul Dumaitre) 女史が一九八六年に書いた『四代の国王の外科医・アンブロアズ・パレ』という本で、私も入手していたが、巻末の文献欄に一九七六年の『日本医史学雑誌』に書いた私の論文のタイトルが収録されていること

は知らずにいたのである。

ラヴァルの行事に喜んで参加するという返事と共に、年頭の『週刊医学界新聞』のパレ特集の部分を送ったところ、日本字のままで西フランス新聞ラヴァル版のトップに掲載されたのであった。これには、これは日本語だぞ、中国語じゃないぞというサブタイトルまでつけられていた。ラヴァルに住む人々よりもパレに詳しい日本の医史学者がこの秋やってくる。国境をこえ、世紀をこえてパレを讃える会にしようではないかという檄文になって、資金集めに役立ったとのことである。

パレの四百年祭という記念行事をやったのはこのラヴァルの一連の行事とわれわれの企画の二つだけで、他の国では行われなかったようである。論文を散見するだけである。

ラヴァルへの旅

フランスへの取材活動を兼ねて私が出発したのは十一月十二日であった。わが国ではこの日特別な祝日になり、空港の警備もきびしく、道路はガラガラになっていた。エール・フランスの好意で、機内では充分なサーヴィスを受けてありったけの種類のシャンペンで前祝をしてくれた。機内に備えつけの出版物『エール・フランス・ジャポン』のトップには、私が提供したラヴァルのアンブローズ・パレの像の写真がのっている。同じ写真のカラー版は雑誌『臨床外科』の十一月号の表紙をかざっている。この外科雑誌には一九八八年一月から毎月写真表紙と「表紙の心」という解説をのせている。これはパレを巡る広報活動として大変役に立っていた。

パリのモンパルナスに近いホテルで先発していた森岡会長他NHKの取材グループと合流。パレの活躍の跡と、記録に残された絵画・彫刻をたずねてパリの町をめぐり、旧医学部館とその図書館・博物館・ソルボンヌ大学（ここには医学部はないが、血管結紮をしているパレの大きな壁画がある）、パレが若い時に修行したオテル・ディユ病院（建物は当時のものと違う）

その他医学系の博物館の画像をビデオに納めた。森岡会長とは個人的にも親しいオテル・ディユ外科のディマリア (D. Maria) 教授の温かい歓迎をうけたのも忘れられない。

いよいよラヴァルへ。この旅には一年ほど前から開通した銀色の新幹線を利用した。十一月十五日、十一月の第三木曜といえはポジョレー・ヌーボー解禁の日である。香りと色のすばらしいワインに頬を染めて降りたったラヴァル駅頭には、ラヴァルの四百年祭関係者や市の助役、報道陣が待ちうけていた。二昔前に一人で未知の土地をトポトボと外科史の巡礼をした時とは大違いである。下へも置かぬもてなしで市内の視察をする。マイエンス川にかかる古い橋とラヴァル城がどんよりとした晩秋の日射しの中で私を迎えてくれた。十八年ぶりの再会である。その晩、フランスのパレ研究の第一人者デュメートル女史もパリからかけつけてくれた。

ラヴァルは町をあげてのお祭であった。目抜き通りにパレ四百年祭の横断幕がかかげられ、パレの肖像で作った大きなポスターが町のあちこちにある。古城を会場にした「人体の映像」という展覧会には、パレとその時代の文献や資料とその後医学の歴史が美しく印象的に並べられていた。極度に照明を落して仰臥位の人体が片膝をたてた立体構造が浮びあがり、その中に展示品がおいてある。別の会場にはコインと切手、絵画の展覧会もあり、十六世紀の楽器を使った十六世紀の音楽会やパレと同時代のモンテーニュとの対話を芝居にした舞台も用意されていた。

市役所におけるレセプションでは四代の国王の外科医パレと天皇の外科医の出会いとして森岡会長が話題になりジャーナリズムに取上げられ、新聞の一面をカラー写真で飾ったり、十八年前に訪れて日本にパレのふるさとを紹介した外科医として私が紹介されたりして、訪問の記念にパレのレリーフや、表がパレの横顔で裏が手術をする人々の姿を彫りこんだメダルの贈呈をうけた。

出張で留守にしていた市長バンソン氏が夜の十時すぎにホテルに現れてカクテル・パーティーがはじまったり、新幹線のラヴァル号という列車の発進式があつて、そのレセプションも同じホテルで行われた。この八室しかない小さなホテル

は町の有名レストランで、主人は日本でシェフも勤めたこともあるといい、われわれの部屋にゆかたが用意してあったのは驚いた。二十年前、このレストランで昼食を食べた記憶がある。

国際歴史コロキウム

取材したビデオの編集の都合で一旦パリに引かえし、他の四人の人々と別れて、「国際歴史コロキウム「パレとその時代」の発表に備える。二十年前、パリ留学時代の友人で仏文学の専門家がパリに滞在していて全面協力してくれた。細川哲士氏と清水康子氏の御夫妻である。親切にもラヴァルの会場へも参加してくれた。

もう一人日本人で参加してくれたのは、オランダのライテン大学にいた石田純郎氏である。コロキアムの前日ラヴァル城の展覧会場でナッブザックを背にした見かけたことのある顔が立っていた。思いがけない出会いはいはうれし、こうして色々な型で参加した日本人がいることでコロキウムは一層盛りあがった。

ラヴァルには大学がない。したがって四百年祭の役員は市役所の人々と郷土史家、それに高校の教員といった人々が中心である。ラヴァル西南の郊外の農業学校の講堂には三百人のラヴァルの名士や専門家が集っていた。

演者は十三人で、一日半かけて行われるこのコロキウムはパレの時代のラヴァルの状況、政治・宗教・医学・戦争など広い分野から成り立ち、フランスにおける一流の人々が弛せ参じて発表した。

私の演題は「パレ外科の旅・フランスから日本へ」というもので何故私がパレに夢中になったのか、何故極東の国日本がパレを敬愛するのか、オランダ経由で日本に伝わり、受けとめられたパレ外科を多くの画像のスライドと共に紹介した。「外科医は処置のパンセをする時に思考のパンセもしなければならぬ」。十六世紀パレの時代のフランス語はこの二つの言葉が同じ綴りであった。遠い外国の人間が古語の言葉のあやを使ってフランス語でしゃべるのだから、聴衆は大いに湧いたのであった。この辺のところは石田氏が『日本医事新報』に報告しておられる。国際コロキウムといっても演

者が全部フランス語だったから苦痛だったかもしれないが、あの雰囲気をも日本に投稿してくれたことに大変感謝している。

「アンブローズ・パレ万歳、ラヴァル万歳」としめくくった二十分ばかりの講演に十回のごよめきと十回の拍手、これは私にとって生涯忘れられない思い出になるであろう。

ダビッド・ダンジェーの彫刻美術館

これは四月の東京の例会で発表したことであるが、今回のフランス滞在中、取材と発表の二回のラヴァル行きの間を利用して、パレの立像を刻んだ彫刻家ダビッド・ダンジェー (David d'Angers, 1788~1856) の生地アンジェーを訪れた。アンジェーは中世の城塞の代表的な城を持ち、その横を流れるメーヌ川をずっとさかのぼっていけばラヴァルを流れるマイエンス川に連なるのである。十一月末の深い川霧の幻想的な光景に出会えたのは将にパレのお蔭である。

この町にはダビッド・ダンジェーの作品だけで構成された彫刻美術館があり、そこでパレ像の原型に巡りあうことが出来た。ラヴァルの市役所前広場に設置されたのは一八四〇年七月であるが、その前の年に完成していたのであった。ラヴァルの広場では像は高い台の上ののっており、全体が暗い色調になっているので細かい所までは見えないが、屋根のある美術館の白い石膏で、手にとれる位近くに見ることが出来るので、像の横に積んである書物の背表紙に刻んである文字まで見えて、うれしくなった。またラヴァルの町では欠損していたインク入れには羽ペンが立っていることを知ることが出来た。

同じ館内には病理学のビシャーや外科医のラレーなどいずれもパリの医学の名所で見かける像の原型が並んでおり、感動の連続であった。昔の修道院を再建したもので採光がすばらしい。翌日もう一度訪ねたら、前日も来ているからと入場料は無料で入れてくれた。

二週間に及ぶフランス滞在中、特にロアール地方のワインだけでも三十種位味わえた。人・物・歴史いずれも心にしみこむような温かい出会いの連続であった。

日本のパレ四百年祭

帰国してすぐテレビ用のビデオに合わせる解説と座談会の収録があった。伝えたいこと、知ってもらいたいことを一所懸命に語ったつもりである。十二月二十日の命日の晩、NHKの教育テレビで八時から四十五分間全国に放映された。

その晩、六時から東京お茶の水の日仏会館ホールで、アンブローズ・パレ没後四百年祭記念式典が行われた。森岡会長の挨拶、実行委員長の私の経過報告、日本医師会長羽田春兔氏とフランス側のブルジュール氏の挨拶が高橋勝三氏のエスプリあふれた司会のもとに行われた。次いでNHKで用意した大画像に三十分に短縮されたビデオが映し出される。

そのあとが「パレの生涯と業績」に関する私の講演である。どのように編集されているのかわからぬビデオのすぐあとに同じテーマで語ることの難かしさにとまどいながら、十八年の夢が叶えられる喜びに心はずんでいた。酒井シヅ氏の「日本への影響」、作家の加賀乙彦氏の「フランス医学と私」といういずれも味わい深い講演で会は終了した。当夜の出席者は四百人を越していた。出席者にNHKブックス『近代外科の父パレ』が記念に配布された。森岡会長、庶務担当の佐野武氏と私の共著である。

その他の事業

十二月三十日の式典と講演会が今回の頂点であったが、その他十月には日本脳神経外科学会で「パレと脳神経外科」という招待講演、二月の日本消化器外科学会では「四百年前の消化器外科」、そして四月の日本外科学会では第二日目にパレ没後四百年祭記念講演会が行われ、森岡会長の司会のもとに、パリから参加されたディマリア教授、日本医史学会の宗

田一理事長代行と私がそれぞれパレの業績を讃え、後世への影響を浮彫りすることが出来た。昨年日本医学教育学会で私は「アンブローズ・パレを知らない外科医たち」という人を喰った題で発表した、もうパレを知らない外科医は少なくなってくれるのではないだろうか。

四月、日本医学会総会は医史学展示を京都文化会館で持った。その中に内科と外科の偉人としてウイリアム・オスラー (William Osler, 1849~1919) とアンブローズ・パレのコーナーが設けられた。三千人以上の人の目に触れたという。パレに関しては五十枚以上のパネルとビデオの短縮版（これが会場の中の唯一の動きと音の出るメディアであった）が放映された。六月の日本医史学会では日仏のバレ四百年祭を巡った報告をすることが出来たし、同じ京都で四月に当学会主催の市民講座でバレを語ることも出来た。

医学を文化として一般の人々の意識の中に基盤を与えることによって、医学や医療に対する考え方を豊かにし共鳴することが出来るようになる。特に歴史には大きな力があると信じている。

もう一つ大切な報告が残っている。それは四百年祭を通して日仏交流を深めたことから生れた産物である。

パレの生地ラヴァルへ日本から感謝の気持ちをこめて石碑を贈るということである。石に刻んで誰の目にも触れる所に置けば、その意義は大きくなる。パレの像に出会ったことから始まった事業である。その記録を残すことも大切であろう。

フランス人の提案で石灯籠と組にして贈ることにした。

茨城県の真壁市で作り、一月十九日市内の五所駒滝神社でお祓をうけて送り出した。パレに捧げる日仏両語の文字を刻んだものである。五月十八日ラヴァル市のペリーヌ公園で除幕式が行われたとのことである。

ペリーヌ公園はラヴァル出身の偉人たちの業績を讃える公園で、マイエンヌ川と城とテー・ジェー・ヴェーの走る高架橋を見おろす高台である。近くにナイーブ派の画家アンリ・ルソー (Henri Rousseau, 1844~1910) の墓もある。

おわりに

一人の外科医を巡って日仏の交流を深め、歴史と現代の外科をしっかりと結びつけることが出来た喜びは大きなものである。そしてそのことを後世に残す石碑が出来、しかるべき所に据えられたことをこの上なく喜んでいいる。

あと、この記念事業を記録する出版物の準備に追われているが、色々な型で御協力いただいた会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

(慶應義塾大学医史学研究室)